

## P-54

## 蕁麻疹に対する甘草湯の使用経験

○川俣博嗣

亀田総合病院 東洋医学診療科

【緒言】蕁麻疹は皮膚のマスト細胞から遊離するヒスタミンによって惹起される。組織学的には真皮上層の一過性の浮腫であり、毛細血管の拡張と透過性亢進をきたす物質が関与する。治療は抗ヒスタミン剤がすべての蕁麻疹に第一選択薬であるが、今回、食事性や物理的的刺激による蕁麻疹に甘草湯エキス剤で良好な経過を得たので若干の文献的考察を加え報告する。

【症例1】16歳、女子高生。中学生になってカニやエビを食べると必ず蕁麻疹が出現するようになった。このアレルギーの体質改善を希望し2001年1月15日皮膚科から紹介受診。血液検査ではおもな魚のIgE RASTの上昇は認めなかったもののエビ、カニ、ハウスダストで陽性。和漢診療学的には軽度の冷えと便秘を認めた。この蕁麻疹に対して茵陳蒿湯エキス6gを投与したところ蕁麻疹症状は徐々に軽快したため自己中止となった。しかし、7月頃から入浴後の温熱刺激で再び蕁麻疹が出現するようになった。茵陳蒿湯を再開したが軽快しないため甘草湯エキス4gを朝と入浴前の2回の服用としたところ入浴時の蕁麻疹は軽快、同時に食事性の蕁麻疹もほぼ消失。現在は突然の蕁麻疹の発症に対して甘草湯エキス剤を携行し出現時同湯を服用し軽症で蕁麻疹が治まっている。

【考案】甘草湯は傷寒論、少陰病編に「少陰病二三日咽痛者可與甘草湯。不差與桔梗湯」とあり、おもに激しい咳や咽頭痛の緩解として使用されていた。また「急を緩め、諸薬を協和し、百薬の毒を解す。」とあり蕁麻疹などへの応用も可能と考えられるが蕁麻疹に用いた論文は少ない。強ミノCは薬疹・中毒疹、蕁麻疹に有用な薬剤であることから、同じ成分の甘草湯も薬疹・中毒疹、蕁麻疹に有効と考えられ、しかも経口投与できることから、これらの皮膚疾患に対して今後甘草湯が使用できると思われる。